

## W-3

### 日英語比較統辞論研究の現在：自由併合理論における移動と埋め込み

日本言語学会 第 153 回大会ワークショップ

2016 年 12 月 4 日(日)

福岡大学

#### 1. 概要

企画・司会者：小林亮一朗(上智大学大学院/日本学術振興会)

発表者：小林亮一朗(上智大学大学院/日本学術振興会)

杉本侑嗣(上智大学大学院)

永盛貴一(上智大学大学院)

#### 2. ワークショップの目的

本ワークショップは、極小主義の枠組みにおける日英語比較統辞論をテーマに、3 つのケーススタディから構成される。記述的妥当性を満たすべく Kuroda (1965)以降、日本語の様々な構文の記述的研究が成されてきた。原理パラメーター理論では、日英語間差異について「なぜ」を問うた Fukui (1986)、Kuroda (1988)など重要な研究が説明的妥当性の達成に向け行われた。しかし極小主義では空範疇原理を始め、多くの原理が理論的根拠を失い被説明項となったことで、特定の構文を説明するための ad hoc な機能範疇や素性が多く仮定され、批判(Fukui and Sakai 2003 他)の対象となっている。それらを排除すべく、自由併合理論(Chomsky 2004)における移動と埋め込みに焦点を当て、3 つの重要な現象:「受動文」・「繰り上げ構文」・「難易文」について、より説明的に妥当な分析の提案を目指す。研究発表と討論を通じ、今後の日英語比較統辞論に関する理論研究への寄与を目的とする。

#### 3. ワークショップの構成

10:00~10:10：企画者による序論

10:10~10:35：発表① 小林亮一朗「日本語受動文の比較統辞論」

10:35~11:00：発表② 杉本侑嗣

「相理論と埋め込み文からの繰り上げにおける日英語間差異」

11:00~11:35：発表③ 永盛貴一「難易文の統辞論と日英語間差異」

11:35~12:00：質疑応答と全体討論

#### 4. 各発表の題目と要旨

序論

小林 亮一朗(上智大学大学院/日本学術振興会)

本ワークショップの目的を説明し、日英語比較統辞論の重要な先行研究の概観を行う。具体的には、「一致現象の有無と日英語間差異の関係(Fukui 1986, Kuroda 1988)」と、「ad hoc

な機能範疇/素性の想定に関する批判(Fukui and Sakai 2003 他)」について簡潔に触れる。最後に 3 つの研究発表の内容についての簡単な紹介を行い、以下本論への導入とする。

#### 日英語受動文の比較統辞論

小林 亮一朗(上智大学大学院/日本学術振興会)

本発表はいわゆる間接受動文(1)について、何故それらが日本語にはあるが、英語には無いのかという問いに、「語彙項目(Lexicon)の  $\phi$  素性の欠如」から説明を与えることを目指す。

- (1) a. ジョンが[メアリにピアノを弾か]れた (他動詞)  
b. 太郎が[雨に降ら]れた (自動詞)

直接受動文には(i)移動分析(Kuno 1973, 井上 1976)と、移動を仮定せず「られ」が動詞句を埋め込む(ii)埋め込み分析(Kuroda 1965, Kitagawa and Kuroda 1992)の 2 つが存在するが、間接受動文については埋め込み分析で派生されるという研究者間での見解の一致を見ている(Hoshi 1999)。ここから少なくとも日本語には、埋め込みを用いた受動文が存在すると言える。本研究では最適な言語設計の観点から自由併合理論を採用し、普遍文法に受動態の派生として(i)移動と(ii)埋め込み方略、両方が存在すると仮定する。そこから  $\phi$  素性一致を欠く日本語は、自由な併合適用により(i)/(ii)両方が利用可能であるが、英語は(ii)の埋め込み方略が  $\phi$  素性一致により阻害されることを指摘し、日英語受動文の言語間差異を導き出す。

さらに(2)の構文(Hoshi 1991)にも分析の拡大を試みる。日本語と異なり、 $\phi$  素性の一致で get が動詞句を埋め込めず、代わりに  $\phi$  を欠く形容詞句的な小節を補部にとると主張する。

- (2) John got [his son arrested/killed]

全体を通して、「統辞部門は言語普遍的で、言語間差異は演算の入力である語彙項目の違いに帰着する」という Chomsky-Borer Conjecture を支持する。

#### 相理論と埋め込み文からの繰り上げにおける日英間差異

杉本 侑嗣(上智大学大学院)

本発表の目標は、日本語や英語などでの節を超えた A 移動に関する統一的説明を試みることにある。Chomsky (1973)以来、A'位置から A 位置へ移動は不適切な移動として排除されてきた。英語やドイツ語の定形節を超えた raising は非文法的である一方、日本語の hyper-raising では節を超えた移動が存在する。さらに英語の tough-構文でも不適切な移動がなされているとされている(Hicks 2009, Obata and Epstein 2012)。本発表ではこのような現象が Chomsky (2013, 2015)で述べられているラベル付けアルゴリズム(labeling algorithm)、相理論(phase theory)、さらに主辞同士の対併合(Epstein, Kitahara and Seely 2016)の観点から説明を試みる。Chomsky (2015)では  $v^*$ の相において、head movement によって相主辞  $v^*$ が見えなくなることを提案している。つまり、内的対併合(internal pair-Merge)によって相主辞

が統語部門で見えなくなり、 $v^*$ は不活性な状態になる。Epstein, Kitahara and Seely (2016) はこの効果を外的併合(external pair-Merge)にまで拡張し、bridge verb の分析をしている。本発表ではこの外的併合を C の相にまで拡張して、不適切な移動に関して説明をする。さらに典型的な不適切な移動と Chomsky (2015)における C の相での分析を統一的に説明することを試みる。

#### 難易文の統辞論と日英語間差異

永盛 貴一(上智大学大学院)

本発表は、日本語の難易文(Tough-construction)の統辞的分析を自由併合理論(Chomsky 2008, 2013)と循環格理論(Bruening 2001, Narita 2007)に基づいて提示し、その理論的帰結を探ることを目的とする。難易文は日本語の埋め込み構造の中でもその性質があまり明らかになっているとは言えない現象である。極小主義の枠組みにおける難易文の代表的な研究としては Inoue (2004)を挙げることができるが、本発表ではそれに対する代案を提示したい。具体的には、再帰照応形「自分」、尊敬語化、二重目的語抽出、結果句等を用いて統辞的性質を明らかにした上で、日本語の難易文は直接受動文と並行的に A 移動現象として分析されるべきであると主張したい。また難易文は日英語間で補文主語抽出に関して重要な相違が見られる。日本語の難易文では補文主語が主文主語になることが可能であるのに対して、英語の難易文ではそれが不可能である。しかし、この日英語間の差異に関しては、従来説明が与えられてこなかった。そこで本発表では、この問題に対して、日英語の難易述語の取り得る補文構造の大きさと(日本語は  $vP$ 、英語は  $CP$ )、近すぎる移動を禁じる普遍文法の原理(cf. Fukui 1993, Erlewine 2014)との相互作用によって自然な説明を与えることを試みたい(cf. Brillman and Hirsch 2015)。

#### 5. 参考文献

- Brillman, Ruth., and Aron Hirsch. (2015). An anti-locality account of English subject/non-subject Asymmetries. Paper presented at the 50<sup>th</sup> meeting of the Chicago Linguistic Society.
- Bruening, Benjamin. (2001). Syntax at the edge: Cross-clausal phenomenon and the syntax of Passamaquoddy. Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam. (1973). Condition on transformations. In Roderick A. Jacobs., and Peter S. Rosenbaum. (eds.), *Readings in English transformational grammar*, 184-221. Waltham, MA: Ginn.
- Chomsky, Noam. (2004). Beyond explanatory adequacy. In Belletti, Adriana. (ed.), *Structure and beyond: The cartography of syntactic structures 3*, 104-131. Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam. (2008). On phases. In Freidin, Robert., Otero, Carlos., and Maria Luisa Zubizarreta. (eds.), *Foundational issues in linguistic theory*, 133-166. Cambridge, MA: MIT

Press.

- Chomsky, Noam. (2013). Problems of projection. *Lingua*, 130, 33-49.
- Chomsky, Noam. (2015). Problems of projection extensions. In Di Domecino, Elisa., Hamann, Cornelia., and Simona Matteini. (eds.), *Structures, strategies and beyond*, 3-16. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Epstein, Samuel David., Kitahara, Hisatsugu., and Daniel Seely. (2016). Phase-cancellation by external pair-merge of heads. *The Linguistic Review*, 33(1), 87-102.
- Erlewine, Michael. (2014). Anti-locality and optimality in Kaqchikel agent focus. Ms., MIT.
- Fukui, Naoki. (1986). A theory of category projection and its applications. Doctoral dissertation, MIT.
- Fukui, Naoki. (1993). A note on improper movement. *The Linguistic Review*, 10, 111-126.
- Fukui, Naoki., and Hiromu Sakai. (2003). The visibility guideline for functional categories: Verb raising in Japanese and related issues. *Lingua*, 113(4), 321-375.
- Hicks, Glyn. (2009). Tough-constructions and their derivation. *Linguistic Inquiry*, 40 (4), 535-566.
- Hoshi, Hiroto. (1991). The generalized projection principle and its implications for passive constructions. *Journal of Japanese Linguistics*, 13, 53-89.
- Hoshi, Hiroto. (1999). Passives. In Tsujimura, Natsuko. (ed.), *The handbook of Japanese linguistics*, 191-235. Oxford: Blackwell.
- Inoue, Kazuko. (1976). *Henkei Bumpoo to Nihongo 2* [Transformational Grammar and Japanese 2]. Tokyo: Taishukan.
- Inoue, Kazuko. (2004). Japanese ‘tough’ sentences revisited. *Scientific Approaches to Language*, 75-112.
- Kitagawa, Yoshihisa., and Shige-Yuki Kuroda. (1992). Passive in Japanese. Ms., University of Rochester and University of California San Diego.
- Kuno, Susumu. (1973). *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuroda, Shige-Yuki. (1965). Generative grammatical studies in the Japanese language. Doctoral dissertation, MIT.
- Kuroda, Shige-Yuki. (1988). Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. *Lingvisticae Investigationes*, 12(1), 1-47.
- Narita, Hiroki. (2007). Spelling-out case-values: In view of passive constructions, with special reference to Japanese possessor passive. In Yoshino, Tomoko. (ed.), *Proceedings of the 21st Annual Meeting of the Sophia University Linguistic Society*, 1-24.
- Obata, Miki., and Samuel David Epstein. (2012). Feature-splitting internal merge: The case of tough-constructions. In Uribe-Etxebarria, Myriam., and Vidal Valmala (eds.), *Ways of structure building*, 366-384. Oxford: Oxford University Press.